

よし……この娘も
攻略できたぞ

俺は自室の机で、目の前のディスプレイを眺めていた。

お兄ちゃんに抱いて欲しいって……
よしすぐに抱いてやるからなっ！

マウスをクリックする
右手人差し指の動きに拍車がかかっていく。

画面の中の妹は、恥じらいながらも身のままじっとする
衣服を一枚ずつ脱ぎ捨てていった。

じくじく……

やがて現れた、一糸まとわぬ可憐な妹の裸身。

じゃあいくよ…

ディスプレイに表示される主人公の台詞と現実の俺の台詞がいつの間にかシンクロする。

静かに挿入し、ゆっくりと抽送が開始された。

.....

固唾を飲んで見守る俺。最初はゆっくりだった抽送が次第に激しさを増していく。

A 3D-rendered bedroom scene. In the foreground, there is a bed with a white sheet and a brown headboard. To the right, there is a desk with a computer monitor and a black office chair. In the background, there is a bookshelf filled with books and a window with blue curtains. The room is lit by a large, glowing light fixture on the ceiling.

ああっ こんな可愛い声で
あえいじゃって…

同時に上がってきた嬌声が
ヘッドホンを通して両耳を震わせる。

ももっ
我慢できないっ…

情欲が昂ぶってきた俺は
とうとう股間のファスナーに手をかけ
勃起した逸物を取り出そうとした。

ねえお兄ちゃん！
勉強教えて！

ドアが突如開け放たれ
ヘッドホン越しでも十二分によく聞こえるほど
大きな声が鳴り響く。



ひくっ

げっ……！

俺は慌てて起動中のゲームのウィンドウを閉じ
頭からヘッドフォンを外すと
椅子を回転させて侵入者に対し向き直る。

おおいつ…
ノックもなしに入ってくるなよ…

きちんとノックしたもん

いくらノックしても
返事が返ってこないから
ドアを開けたんだよ



口を尖らせ俺の元へと近づいてくる
この娘の名前は小羽(コハネ)。
現実世界での俺の妹だ。

お兄ちゃんったら
またエッチなゲーム
してたんでしょ

べ別にしてないって…!

ふっん



じゃあ さつきから聞こえてくる
んちゃんちゃっていう音は
何なのかな？

しまった……!!

妹の指摘で、ヘッドフォンからゲームの効果音が
漏れ出していたことに気付いた俺は
慌ててパソコンの音量設定をミュートにした。

いまさら隠しても無駄だよ

お兄ちゃんがエッチなゲームに
夢中になってるって

私も含めてお父さんやお母さんも
みんな知ってるんだから

マジかよ……

突きつけられた真実に、背筋が寒くなる。

まったく…これまで受験勉強で
ストレス溜まってたのは分かるけど…

無事大学に合格した途端
エッチなゲームや
動画に夢中になっちゃって…

大学にもあんまり
行ってないんでしょ？



仕方ないだろう
ずっと長い間
色々我慢してきたんだからっ！

そう、俺は一年前から脇目も振らず志望大学に合格するため勉強に勤しんできたのだ。それこそ、オナニーする暇もないほどに……。



その反動が、晴れて大学合格し無事入学した今となって盛大に出ているというわけである。

部屋にこもってることが多いから
家族みんながお兄ちゃんのこと
心配してるんだよ

ねえ 部活とか
サークルには入らないの？

別に運動系じゃなくても
オタク系のサークルとか
あるんでしょ？

バイトとかも始めたら？
いい社会勉強になると思うし……



な　なんでそんなこと
お前に説教されなきゃ
なんないんだよ

さつきも言ったでしょ？
心配なの

それに…お兄ちゃんったら
以前のよう
私に構ってくれなくなっただじゃん…

昔は自分から
私に勉強教えに来てくれたのに…
今じゃすっかり…

.....

言葉が出てこない。痛いところを突かれた気がした。

ととにかく……今はお兄ちゃん
大事な大事なプライベートタイムの
真っ最中なんだ

勉強なら後で見えてあげるから
この場は引き下がってくれ

な
な……

動揺してしまっていることを悟られないため、
どうにかして「ニ」は「ご退場」いただくしかない。

な「ニ」よ…

急に室内の空気が、ぴりりとしたものに変化した。

勉強ぐらい
すぐに見てくれたって
いいじゃない！

いいよっ
そっちがそんな態度ならー

しやがみ込んだ小羽が、コンセントからケーブルを引き抜く。
瞬間、ディスプレイが真っ暗になった。

あっ…なっ 何すんだよ！
まだセーブしてないってのこー



起動中のパソコンの電源ケーブルを引き抜くという
あまりにも突発的な行動に、驚いて声を上げる。
デスクトップ型なのでいきなり電源が落ちるのには弱かった。

お兄ちゃんったら現実の妹よりよっぽど
ゲームの中の妹が大切なんだ…!

な 何だって…!?

俺がよくプレイするエロゲーの特徴を
言い当てられ内心どきまぎする。

まあ、机にある積みゲーのパッケージを見れば
素人目からでも判別はつくか。

俺はそんなこと
思っただけで

嘘だっ！

私のこと放ったらかしにして
エロゲーに夢中になってるじゃんっ！

だから夢中になって
何が悪いんだよっ！

エロゲーをすることに対し
あまりに批判されるものでいついつい怒鳴ってしまった。

あま

そう叫ぶと小羽は、駆け足でこの部屋から出ていった。

お兄ちゃんの
馬鹿っ!!!

何なんだ…一体…

これまた突然のことで、呆気に取られてしまう。

それにしても…
いきなりパソコンのケーブル
引っこ抜くことないよな

最後にセーブしたの
2時間ぐらいは前だぞ…

あそこまでの苦労を
返してくれっ…小羽…

「」にいない妹に対し、愚痴るしかない俺だった。

もうっ
お兄ちゃんったら……

自分の部屋に戻った私は
ベッドに突っ伏して先ほどのやり取りを思い出していた。

あんな架空の存在に
夢中になっちゃって……

現実世界では
身近にこんな可愛い妹が
いるっつのに……

お兄ちゃんは昔から
熱中すると周りが見えなくなりがちだ。
まあ逆に言えば、集中力がすごいっていう証拠。

自分の学力よりも数段上の志望大学に合格したのも
その集中力があってこそ。
でも、何もえっちなゲームに夢中にならなくても……。

「これまではよく私に構ってくれたのじゃ…」

大学に入学してからというもの
お兄ちゃんは何かに取り憑かれたかのように
えっちなものに熱中している。

部屋に籠もっているお兄ちゃんに対し
どうにか構ってほしい私は、さっきみたいに
口実を付けコミュニケーションを取ろうとするものの
そのたびに適当にあしらわれてしまう。

これじゃまるで、お兄ちゃんを
えっちなものに取りられちゃったみたいだ。

ぐすっ…

お兄ちゃんったら
人の気も知らないで…!!

思い悩んでいる時、頭の中で電球がぴこーんと鳴った。

待って…何も裸じゃなくても
水着とかでいいんじゃない…!

確か男の人って女の人のグラビアでも興奮するんだよね…
うん! それならいけるかも!

確信した私は、思わずベッドの上でガッツポーズを取る。

待っててお兄ちゃん…他でもない妹の私が
あなたのことをメロメロにしちやうんだから…!!

さて
この娘のルートも
コンプリートか…

ある日の夜
俺は自室でいつものようにエロゲーに興じていた。

次はどの娘にしよう？
といっても…妹キャラは
全部攻略してしまったしな…

俺の趣向は少々偏っており
二次元ではいわゆる妹キャラでしか
抜けないのだ。

よしまだ全ルート攻略してないけど
思い切って次のゲームに移るか…

棚の上に積んである積みゲーから一本を選び出すため
俺が椅子から立ち上がったその時
コンコンコンと3回ノックの音が行儀よく聴こえてくる。

お兄ちゃん
入っていい？

またあいつか…
まったくタイミンダの悪い時に限って…

…コンコン

仕方なく返事をした。
ガチャリと扉が内側に開く。

うおっ…

俺の目に飛び込んできたもの。
それは小羽のスクール水着姿だった。

えへへ…
似合うかな？

ああ…すいじへ…

小柄な身体にスク水というのは
まさに妹萌えの俺の趣向を
そのまま体現しているようなもの。

我が妹とはいえ、正直言って堪えられないものがある。

お兄ちゃん
部屋に入っていていいかな？

あっ
ああ…

ついつい見とれてしまった俺は
妹の言葉で我に返った。

一体どうしたんだ？
いきなりスク水なんか着て…

俺の質問に対し
部屋の中央まで進み出た小羽は
振り向きざまに足を止め答える。

…実はね

私がお兄ちゃんのおカズに
なつてあげようと思って

<u>…

呆気にとられる俺。
今、オカズになるって言ったよな……？

だってさ お兄ちゃんは
こういうの好きなんですよ？

確かに認めざるを得ないが……
でも本気で言ってるのか？

ちよつと、先ほどプレイしていたゲームの
シチュエーションにあまりにも似すぎているため
どうしても信じられないものがあつた。

うん!!!いつもお兄ちゃんが
オカズにしているものみたいに
裸になるのはイヤだけど

水着くらいまでなら
私にだって...

なんなら写真
撮ってもいいよ?

写真って、スマホでか?



うん 写真さえスマホに保存しとけば
私がいなくてもその…
しこしこするのに使えるところから…

言いながら赤くなった顔を
いかにも気恥ずかしそうにうつむかせる水着姿の妹。

あれ？小羽のやつこんな可愛かったっけ…？



普段はわがままで少し鬱陶しいところがある我が妹だが
こうして恥じらいを見せる姿というのはその
着用しているスク水と合わせてなんとも可憐な印象を受ける。

.....

イヤかな...?!



少しの間逡巡していたものの
心配そうに訊いてくる小羽にやはりグッとときてしまった俺は
この魅力的な提案に乗ってしまふことにした。

いやそんなことない…
ありがたく撮らせてもらっつよ

ホントっ!?!?
大好きお兄ちゃん!

ぱっと顔を明るくさせ、水着姿で俺に抱きついてくる小羽。

「うらうら
うらうら」
そんなに身体を押し付けるな……

凹凸のない身体ではあるものの
ぐいと密着されるのは気恥ずかしい。



なんか俺……体よく乗せられたような気がする……

なにはともあれ、こうして俺と妹
二人っきりの撮影会が開始されることとなった。

んっよ...

ベジブの上で四つん這いになり
こちらからお尻を向けてくる小羽。

もっとお尻を上げてくれ

んっよ？

俺の指示に従い、小羽は腰をより高く掲げる。

よし
いっぞ...

いっぞ...

見事なまでの丸みを帯びた、スク水姿の我が妹のお尻。中央の割れ目には紺色の布地がきゅっと食い込んでおり左右の尻肉のポリューミーさを強調している。



あのっ…お兄ちゃん…
撮影は？

あっ ああっ…

妹の呼びかけでやっと我に返る。
いかんいかん。生唾を飲み込んでから
ついすっかり見とれてしまっていた。

気を取り直し、俺は手にしたスマホのカメラを起動させ
ぷりんとしたお尻や太ももといった、オカズになるモノを
次々と撮影していく。

おい！小羽のやつ
こんな魅力的だったのか！

カシヤカシヤとスマホを鳴らしながら
俺は妹の身体がやけに艶めかしいこと気づく。

うめき……

後ろを振り向く小羽の口元から
うめきにも似た声が漏れ出す。

！お尻とか太ももとか
じろじろ見られて
すごく恥ずかしい…

そそろうか
すまんっ…

申し訳なくなり、慌てて視線を逸らそうとする俺に対し
頬を赤らめたまま小羽は呟く。

でもっ…お兄ちゃんに
興味を持ってもらえて
嬉しいっ…

だから遠慮しないで
もっとう見せてっ…

小羽…

羞恥にもだえながらも
喜びの気持ち俺に伝える妹。

お言葉に甘え、俺は撮影を再開する。

うっ…け…やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいよ…

はあ…ふっ…

おい小羽…?

妹の口元から漏れ出す吐息は
やけに艶やかなものへと変化していく。

じゅわっ…

どうしたんだ…
えっ!?

そこで俺は、妹の股ぐらに食い込んだ布地がほんの少しだけ染み付いていることに気づく。

お
おいらそわっしっ……っ？

条件反射に近い感じで訊く。
小羽は赤面したまま、口をつむいでいた。



やっぱり「わっ」って興奮してきたって「う」とだよな…

ほぼ間違いないであろうその事実
に俺の衝動は高ぶっていく。

気づけば無意識のうちに、妹の股ぐらに手を伸ばしていた。



ひあっ……！
ちよっとお兄ちゃん……
お触りは禁止だってばあ……

驚きとともに
戸惑いの声を上げる小羽。

むにっ

俺はかまうことなく、人差し指と中指を
割れ目の部分にあてがい
さらには押し当てていく。

はっ……あっ……ああっ……

いついやあ
お見ちやんっ…

食い込ませれば食い込ませるほど
指全体がじつとりと蒸れていき
さらに濡れていく。

それに伴って響いてくる、うわずった声は
俺をひたすらに昂ぶらせるものであった。

っ…!

すこ

俺の股間は、いつの間にかびんと張り出していた。

お兄ちゃん それって…

……

私で勃起
しちゃったの…？

ああ…

そ…そうなんだ

すこ



少しの間、室内に沈黙が流れる。

無言で見つめ合う俺と小羽。何も言わなくともお互いに昂ぶっていることは明白だった。

ととりあえず…
これだけだとオカズとしては
足りないな…



…おっぱいも
見せてくれないか？

えっ……!!？
それはいくらなんでも……

そそう……？

意を決して沈黙を破った俺は
さらに勇気を出して一言。



いいよ……
ちよつとだけなら……

……

案の定、戸惑いの反応を見せる小羽に対し
俺は両手を合わせて頼みこむ。

そ「」をなんとか……



小羽は体勢を変えこちらに向き直ると
両肩に両手をあてがい、水着をずり下ろした。

おおっ おおっ…

どうかな…
お兄ちゃん、興奮する？

露わとなった小羽の胸元。
小ぶりな膨らみがなんともエロティックだ。
妹モノが好きな俺としては、ただただ感銘を受けるしかない。

ああっ
すごく...

恥じらいながらも反応を確かめようとする
妹の仕草が愛らしく、心中のドキドキは
昂ぶっていく一方。

気づけば股間部のテントは
更に勢いよく張り出していた。



お兄ちゃんのお股
まるでテントみたい……

興味深げに、兄の股間部をしげしげとながめる妹。

それはいいのだが、勃起した亀頭部分に
パンツの生地が密着し痛い。
それに、しこしこしたくてたまらない……。

「う」はもう、脱ぐしかあるまい……！

くあつ…
もう限界だっ！

えっ…!!…?

きよとんとする妹の眼前で
俺はズボンを下着ごとずり下ろす。

きやっ…!!…

ズ
ン
ッ

びいんと反り返った男根を目の当たりにし
小羽は心底驚いている。

す
すまんっ
びっくりさせて...

もう俺
オナニーしたくて
我慢できなくなっただんだ...

弁明をする俺。
一方の小羽は
勃起状態の男性器をしげしげと眺めている。

私のおっぱいで
オチンチンこんなに
してくれたんだね……

感慨深げに呟く。小羽にとって
自分の性的魅力で男性が勃起したというのは
初めての興味深い体験なのだろう。

俺の勃起チンチンを
小羽が見つめている……

敏感な個所に視線をびんびんに感じるようになってからは
エロゲーでは味わうことができない
生での素敵な体験であった。

お兄ちゃんのおチンチンおっきいね

昔一緒に風呂に入った時はこんな大きくなかったのに！

何気なく妹の口から出た『お兄ちゃんのおチンチンおっきい』という台詞。それは妹萌えの俺の血を、心からたぎらせる。

熱情が俺に、大胆な発言を可能にした。

なあこれ……
触ってみたいか？

……

うん……お兄ちゃんの
オチンチン触ってみたい……



ベッドの上に仰向けに寝そべった俺。
その正面に小羽が来て
勃起した逸物を左手で握る。

すーいっ…

おちんちん近くで見ると
迫力満点だね…

妹は、いかにも興味深々と言った感じだ。

うっ…そんな…じろじろ見られたら…
感じてしまっ…

純粹無垢な視線を向けられたことにより
否応なしに昂ぶった俺の男性器が脈打ち
先走った汁がたちまちに漏れ出してくる。

あっ お兄ちゃんのオチンチン
私の手の中でびくんびくん跳ねてる…



これも興奮
してきたからなの？

ああ…

そうなんだあ…

興奮したオチンチン見ると
なんだかドキドキするよ

恥ずかしげに呟く我が妹。
我慢できずに俺も呟く。

なあっ そのまま上下に
オチンチンしごいてくれないか…

しゃっ

しゃっ

えっ…うっ…
いいよ…

素直に肯定した小羽は
握りしめた左手を、ゆっくりと上下させはじめる。

んあっ……くっ……

どどど
お見ちゃん……？

さっ
最高だっ……

掛け値なしの感想を述べる。
実際、妹のしなやかな指先でしごかれるというの
は普段自分の太い指先でしごくのととは
別次元の気持ちよさだった。

しゅっ

しゅっ

だって私がお兄ちゃんの
オチンチンしごいてるから…

なんかイケナイこと
してる気がして…

でも俺にとっては
最高のオカズになるんだ

しゅっ

しゅっ



いっしょに……

あ……

戸惑う小羽を追求して納得させる。
少々意地悪のような気がするが
今後最高のオカズで抜くためには仕方のないことだ。

上下の「いき」は継続される。

くっ はあっはあ…

しゃっ

しゃっ

股間部の性感がぐんと昂ぶり、たまらず俺はあえぎ出す。



お兄ちゃん…
すごく興奮してるんだね

時おり、股間部から俺の顔に視線を移しながらも
上下のしごきを続けていく妹。

これから男性器がどうなるのか
楽しみにしているように見える。

しゃっ

しゃっ



そして急速に膨れ上がった射精衝動が
一気に臨界点を突破する。

あ……ぐっ！

ド
ム
ル
ル
ッ

えっ……

オチンチンの先っぽから
白いお汁が
ぴゅっぴゅっ出てるっ！

射精という現象は
興味深いものだったのか
小羽はまじまじと見つめている。

やべっ…思わず出しちゃった…
よりによって妹の目の前で…

あまりにも唐突すぎて
こらえる暇もなかった。

ねえ これって
精液…だよね？

ギ
ニ
ッ
♡

—!?!?

妹の口から『精液』という
単語を聞いた俺は衝撃を受ける。

ま……ま……我慢できな……

身体を流れる『妹萌え』の熱い血潮が
今 急速にたぎっていた。

お兄ちゃん？

